

It's All Over

SOICHIRO TAKAYANAGI



It's All Over

高柳総一郎

It's All Over

by

Soichiro TAKAYANAGI 2016

cover illustration (a gear)

by

静弦屋

cover design and art direction

by

Matthew A. KEITH
(t. m. production)

It's All Over

電話が鳴る。

わたしは電話を取る。わたしは垂れた耳を持ち上げ電話を耳に当てる。受話器の先から声がする。男の声だ。男は言う。

「秘書業務の依頼が入りました」

男は続ける。わたしは声を聴く。聞き続ける。歯が痒くなる。長く伸びた犬歯が伸びてくるような感覚を覚える。脳裏を掻きむしられるような感覚。わたしはそばにおいてある、毒々しいピンク色の骨——イミテイション——を口に啣える。心地よい弾力がわたしの脳裏を抑える。

「社長さんは厳しい方です。ミスの無いように」

タイトなダークスーツ。ノーネクタイ。パンプスを履く。ハンドバッグをもつ。いつもこの順番だ。

わたしはアパートを出る。暑い。ホット・プレートの上を歩いているようだ。わたしは舌を出す。べろべろと出す。わたしのてっぺんに太陽がある。呪いのように日差しを浴びせる。わたしはアスファルトの上に降り立つ。革靴が溶けるような感覚を覚える。

わたしはおんぼろの白いカマロにキーを差し込む。エアコンは壊れたままだ。わたしはカセットテープを壊れかけカーステレオへ差し込む。磁気テープが回る。へたくそなDJのようにぶつぶつ途切れた『It's All Over But The Crying』が流れる。肉球をハンドルに置くと、まるで熱せられたフライパンのように熱かった。べろべろと舌を出す。暑い。ここはひとときわ地獄だ。

車が行き交う。

ただ無為に犬々は車を走らせる。わたしもその犬の中の一犬だ。スマートなシェパードが、彼女らしき上品なマルチーズと肩を組んで歩く。ミラーの中のキャバリアは、丸く黒い瞳をどこでもないどこかへ向ける。わたしはそれを見ている。信号機が変わる。わたしはアクセルを踏む。車が走る。わたしの脳裏が掻きむしられる。わたしは首をすこしもたげてイミテーションの骨を啜える。噛む。かじる。

銀行残高が少なくなっている。

わたしは手帳を開いている。わたしは六十ドルで何ができるかを考えている。わたしはタイトスーツの胸のあたりに肉球を当てる。肉球に汗が滲む。べろべろと舌でなめまわす。イミテイションはもう出せない。わたしはTPOをわきまえている。

「デイアナ様」

銀行窓口担当の、小さな老眼鏡をかけたボーダーコリーの雌犬行員がわたしの名前を呼ぶ。わたしは通帳をハンドバッグにしまう。イミテイションの骨が肉球に触れる。犬歯が痒くなる。わたしはTPOをわきまえている。

「全額引き出しということ承っております。ご確認ください」

わたしは爪を札束に差し込み六十ドルを数える。今の私の持っている金はこれだけだ。わたしはべろりと口のまわりをなめる。暑い。このクーラーはろくでもない。サーキュレーターがぐるぐる回る。わたしはそれを見上げている。わたしは刃のようなサーキュレーター羽を見つめている。

「お客様」

人のよさそうな柴犬の行員がわたしに話しかけてくる。

「何か天井に……？」

わたしは頭を振る。用は済んでいる。わたしは刃のような鋭さに、風のような速さに見とれていただけだ。鋭ければ凄い。早ければ凄い。単純な価値観。記号化された価値観。

この世の中には余計なものが多すぎる。もっと単純に生きたい。金を稼ぐ方法をほかにしないわたしには、高すぎる望みだ。わたしは銀行の外へ出る。熱せられたフライパンに手を触れる。肉球が焼け付きそうな痛み。わたしは痛みと共に生きている。失うものがないわたしには痛みと、犬歯の痒みしか持っていないのだ。わたしはカマロのキーを回す。ゆつくりとエンジンに火が点く。熱せられたアスファルトの上を走る。苦しうに、辛そうに。彼に感覚があるのならば、今この瞬間も叫んでいるのだろう。もうよしてくれ。熱い、痛いとし。

わたしは喫茶店でコーヒーをグランテサイズで注文する。ミルクを少しだけ垂らす。砂糖

は入れない。ここでコーヒーを頼むのは飲むためではない。人に会うためには、ここで普通を装う必要があるからだ。

「天気がいいね、ディアナ」

テラス席、オリーブ色のパラソルの下。同じ色のジャケットを羽織ったキャバリアの老犬が腰かけ、グランデサイズのコーヒー片手に新聞を持ち、イヤホンから何かを聴いている。しゃかしやかとビートが刻まれる音からして、テンポの早い曲なのだろう。老犬はつまみがわりにクツキーをかじっていた。

「インク・スポーツはどうだったね？ テープはプレゼントだ。返してもらわなくていいよ」
わたしは彼の隣の席に座り、コーヒーをすすった。熱い。長い舌が火傷しそうだ。わたしは懐から二十ドルを取り出し、肉球で彼のテーブルに置いた。直後彼はその上に新聞を置く。わたしは訝しみ、彼のテーブルに灰皿を置いてやった。

「タバコはやめたんだ。肺をやってしまったね。歳は取りたくないものだ」

老人は何やら手元でテープレコーダーを操作すると、イヤホンを外してそっとわたしに差し出した。わたしは耳を持ち上げ、イヤホンを耳に当てた。

『今日のラッキーナンバーは三十五。機関車はいつも走り続けている。トーマス通り一〇四のピザ屋は最低の味だ。誕生石はトルマリン……』

わたしは領き、グランデサイズのコーヒーを少し飲みながら、立ち上がる。彼の仕事。わたしの仕事。ここ以上のやりとりなどおそらくは必要無い。

「ディアナ、今度食事でもどうかな」

老人は静かに言った。

「この仕事は男との関わりばかりだ。君みたいに若い娘と語らうのも必要なことだ。わたしのような老いばれにはね。出てきたものをそのまま食べるだけでは、腹は膨れても気持ちは良くなりはいないよ。違うかね？」

そういうと、老犬はクツキーを口にほうりこむと、もそもそ食べ始めた。長い犬生。わたしにも同じような犬生があるのだろうか。彼はどんな犬生を送ってきたのだろうか。わたしもいつか、そのように考える日がくるのだろうか。

彼は孤独を恐れている。長い孤独の末に、孤独を恐れるようになったのだ。価値観もいつかは変わる。不変のものはない。

銀行の天井にあるサーキュレーターのように、犬生は進む。回る。しかし世の中はそう単純ではない。わたしは孤独を愛している。しかし、決して孤独でいられることはない。何者かと関わり、金を稼ぎ、グランデサイズのコーヒーを買っている。この老犬とも、そうしたつながりを得ている。

わたしにはわかる。この老犬も、かつては孤独を愛した犬だったはずだ。それでもなければ、このような仕事で長く生き残れるわけがない。

わたしの犬歯が痒くなる。イミティシヨンの骨が欲しくなる。だが、コーヒーシヨップでそれはふさわしくない行為だ。わたしはTPOをわきまえている。

わたしは立ち上がった。ここにとどまる理由は、今は存在しなかった。

「行くのかね、ディアナ」

老犬は柔和に笑い、舌を垂らした。わたしは彼に手を差し出した。握手は別れの挨拶だ。そこにそれ以上の感情は不要であり、相手もそれ以上の言葉を言えなくなる。彼の肉球はからからに乾いてしまっていた。しかしそれでも彼は笑っていた。穏やかに。

白いカマロに乗る。キーを回す。しぶしぶエンジンが回転を始める。グランデサイズの飲みかけをドリンクホルダーにセットする。わたしは助手席に転がっていたピンク色のイミティシヨンの骨を拾い上げ、口に放り込んだ。噛む。かじる。なめ回す――。

サーキュレーターが回る。天井で回転する。わたしの視界が回転する。わたしは革張りの

ソファに寝そべっている。蛇口から出る水はぬるかったが、手を洗うにはよい温度だった。わたしはサイドテーブルに手を伸ばす。紙袋に入ったクロームメッキのリボルバーが、さがさ音を立ててごろりと姿を現した。

わたしはそれに触れるのをやめ、身体を起こした。

窓の外は曇り。空は暗い。まるで夜に堕ちたように。電球のフィラメントが切れたように。わたしの顔が映る。雷が鳴る。人の顔が映る。わたしであって、わたしでない女の顔が。ブロンズの女の顔が。異形の頭がついた顔が。

「これが最後だと思ってトリガーを引くのは、もう何回目なの？」

クロームメッキのリボルバーが鈍く輝く。雷が落ちる。『わたし』の顔にノイズが走る。わたしでない女が覗く。

「骨をかじっても、脳を掻きむしるような痒みからは逃れられない。その痒みはあなたの背負う罪なのよ」

女が笑う。わたしは肉球で頬に触れる。べろべろと舌で口の周りを嘗め回す。罪。トリガー。銃弾。サーキュレーターが回転する。天井で回る。わたしをあざ笑うように。雷が鳴る。光が戻る。蛇口から水滴が落ちる。

わたしはのどを掻きむしるように、肉球で、爪で口に触れる。わたしは犬だ。人ではない。

窓の外にはわたしが映っている。キャバリアのわたしが映っている。わたしは犬だ。リボルバーを掴む。わたしに銃口を向けてみる。トリガーを引く勇氣は無い。わたしは銃口を誰に向けるべきかももう知っている。それ以外の人物に向ける行為に、何も意味がないということも知っている。

わたしはテープレコーダーから『It's All Over But The Crying』を流す。磁気テープが回転を始める。穏やかな歌が流れる。全てが終わった。なにもかもすべてが。だがそうだとするのなら、このわたしの世界の終わりを、いったい誰が決めるというのだろう。ピンク色のイミテイションの骨をつかみ取る。啞える。かじる。

水は還る。下水道を回り、海へと還り、空へと還る。そして雨となって地に落ちる。水は還る。わたしの中へと。イミテイションの中で生きるわたしに還る。窓の外は回り、回っている。

この世界で本当のものとはなんだろう。

わたしは写真を見る。ボルゾイの紳士の顔が写った写真を。送られてきたスナップ写真を。彼は金持ちだ。ホテルを持っている。経済を回している。誰かにとって都合の悪い手段で。わたしがトリガーを引くことで、誰かが都合の良い思いをする。

幸せなどならない。誰も。

この世界はすべてギアで出来ている。同じルートを回転している。誰かがやめればすべて

が止まる。誰かが止まれば代わりの誰かが補充される。

世界は回転する。代替品でないものは、この世に存在しない。わたしのカマロも、わたしの銃も、わたしも、そしてこのイミテーションの骨も――。

ホイールが回る。ラウンド・アバウトを回る。回る。回る。ヘリコプターが頭上を横切る。夜空をローターが裂く。わたしはカマロを走らせている。暗い高速道路の上を走っている。

「二年で夜空は回るわ」

車のサイドミラーに、ブロンドの女が映る。わたしでない女が。わたしでない人が、わたしに話しかける。穏やかに。

「時間は経つ。一年は回るように進むのよ。あなたが逃げたとしても、失敗したとしても、誰か別の犬が送り込まれて死ぬだけ――」

孤独な世界。たった一犬で生きてきたこの世界は、ただ犬々が同じことを繰り返しているだけだ。誰かが誰かである必要はない。誰かが死んでも、また別の誰かが同じ役割を担う。

世界は回る。回転する。トリガーを引けば、リボルバーが回る。リボルバーを回せば、弾

が出る。弾は誰かの頭蓋を砕くだろう。わたしはいつもそうしてきた。誰かの頭蓋を銃弾で砕いて、自分の役割を回してきた。

世界を、ギアを回す行為が正しいかどうか、考えるのはもういぶん昔にやめた。エンジンが回転する。うなりを上げる。ホイールが回る。アスファルトを焼きつけながら、カマロが白い閃光に変わる。

世界にとってただ孤独でいられたら。

それは到底無理であると知っている。ギアは補充される。不要になったギアは捨てられる。それは社会から投げ出され、命を落とすことを意味している。

わたしは同じことを繰り返ししている。黒い瞳にマズルフラッシュの閃光を焼き付け、飛び散った血を金に換えることだけを繰り返し生きている。電話は鳴り続けている。誰かを撃ち殺したら、また別の誰かの声で電話が鳴る。サイケデリックなネオンサインが閃光に変わる。信号が変わる。わたしはアクセルを踏む。

等間隔で植えられたヤシの木が、窓の外を吹っ飛んでいく。単純なロケーション。植物ならば、何も考えずに済むのだろうか。あるいは犬や猫ならば、何も——。意味のない思考が頭の中を回転する。

サイドミラーにノイズが走る。ブロンドの女が映る。タバコを啜えた女が映る。ノイズが

走る。映っているのはわたしだ。キャバリアの、イミテーションの骨を啜えた、べろべろと舌を出すわたしだ――。

回転扉が回る。貨幣加算器が金を回す。いかつい警察犬どもがパトランプを回す。赤い光が通りを満たす。ホテルの中へと殺到する。わたしはその中を悠々と抜け、駐車場に泊めてあるカマロへと向かう。

銃弾は名前も知らぬボルゾイの男を撃ち殺した。脳内で最期が再生される。ビデオ・テープがデッキにのまれた時のように。ノイズが走る。彼は命乞いをする。わたしはリボルバーを突きつけたまま、彼に近づく。足元にはすでに死んだ彼のボディ・ガード。血が流れる。水が低きに流れるように、血は流れていく。

もはやどこにも還ることはない。水がわたしに還るようにはいかない。血は固まり、いざれ特殊清掃員による溶剤によって消え去る定めだ。ちょうどわたしが消した命と同じように。「命は還らないわ」

カマロの窓に女が映る。イミテーションの骨がほしい。わたしはまるで突き動かされるよ

うに、スーツの中をまさぐる。無い。あるはずの骨がない。

「あなたが奪ったものは永遠に奪われたままなのよ。この意味を分かっているの？ あなたは自分の行為がどうということなのか理解していない——」

そんなことはわかっている。

わたしの行為に意味などないことくらい、わたしの仕事に意義などないことくらい、分かっている。ただわたしは金を稼ぎ、ただわたしは無為に生きる。それだけだ。世界を回す行為。ギアは何も考えない。ギアはそれのみでは回れない。存在しえない——。

「それだけじゃない」

女が責める。強い口調で。口へタバコを啜える。ピンク色のタバコを。

「あなたは人を傷つけるのが、ただそれだけが好きなのよ——」

わたしは電話を待つ。

報酬は老犬が売った銃の入っていた、ロッカーの中に入っている。わたしは銃をそこに戻す。老犬が依頼をかけているのか、銃を置いているのか。金を回収しているのかそうでない

のか、わたしは聞いたことがない。これからも聞くつもりはない。わたしはそういうことは望んでいない。ロッカーの裏側には鏡。キャバリアのわたしが映っている。舌をひっこめ、悲しそうなわたしの顔が映っている。

これがわたしだ。殺犬者のディアナが『わたし』だ。

わたしの犬生はそうしたサイクルで回ってきた。犬が同じ散歩コースを喜んで駆け回るように、モルモットが回し車を回転させるように。

わたしは単純な世界で生きている。誰かから銃を受け取って、撃ち殺す。ただそれだけの世界に生きている。永遠にそうすることなどできないことくらい、わたしにだってわかってる。いつか終わりが来ることを信じている。

「終わりがくるまでに、いったい何犬殺すつもりなの？」

ブロンドの女が言う。穏やかに。責めるつもりもないような声で。聖職者のような態度で。私は耳を塞ぐように、テープレコーダーのスイッチを入れる。イヤホンを耳に入れても、女の声は消えない。女の姿も。

「世界の終わりはいつか来るわ」

ロッカーの隣り、公衆電話が鳴る。連絡が来る。この小さな廃事務所の番号を知っているのは、数犬しかいない。たとえば、あの老犬だ――。

「あなた、マクシミリアンさんのご家族でいらっしやいますか」

聞いたことのない声。わたしは反射的に手を放す。受話器がぶらぶらと宙を揺れる。くるくると回る。

「彼が店のテラスで突然亡くなって——でも彼、手帳と食事代以外に何も持っていないんです。手帳の中にあなたの番号が書いてあったので、失礼とは思いましたがお電話を——」

わたしは震える手で受話器を手取る。手元が狂い、通話が途切れる。事実とは思えなかった。思いたくなかった。わたしはイミティションの骨を必死で探す。震える手で。救いを求めるように。『It's All Over But The Crying』が、今更イヤホンの奥から流れる。

わたしの世界の終わり。すべての終わり。それが今やってきた。孤独な世界を守った、尊敬すべき老犬の死によって。ブロンドの女は泣いた。もう還ることのない命へと想いを馳せ、わたしは——。

わたしは墓の前に立っている。

墓石に刻まれた名前はマクシミリアン。わたしは白い花を添える。わたしはピンク色の夕

パコに火を点ける。わたしは手のひらを見つめる。頭上には曇天が広がっている。わたしはテープレコーダーを持っている。わたしはイヤホンを耳に入れると、再生ボタンを押し、曲を流した。『It's All Over But The Crying』を。古い歌を。

磁気テープが回転を始める。歌が流れる。ノイズ交じりのイントロと共に、マクシミリアンにとっても懐かしかったのだろう、古い歌が。

すべてが終わったというのに、涙が止まらない。世の中は回る。マクシミリアンという老人がいたことも、わたしという殺し屋がいたことも、この歌が流行ったことも、世界の終わりが近づく代わりに、何かに、誰かに代わっていくことも、すべてが涙に押し流されていく。わたしはまた世界を回す。電話が来るたびに。永遠に。誰かに取って代わられるまで。

わたしはカマロで雑貨店に寄り、写真立てを買う。わたしは写真立てに唯一持っている写真を挿入すると、電話の隣に置いた。古いキャバリアの写真を。わたしにとって唯一、代わりがないかった存在の記憶を。

電話が鳴る。

わたしは電話を取る。わたしは長い耳を持ち上げ受話器を当てる。受話器の先から声がする。男の声だ。男は言う。

「七十二丁目の庭園に害虫駆除の仕事です——」

わたしはイミテーションの骨を啜える。脳裏を掻きむしるような痒みを感じる。マクシミリアンはもういない。だが新たに仲介人が設定されたに違いない。

世界は回る。世界の終わりに近づきながら、世界というギアは形を変えながら回り続ける。わたしはその中で取って代わられるまで生きていくしかない。

すべてが終わっても、泣いてはいけない。例えその世界から、逃れえない運命だとしても――。

